

紀行

早春の日 向路へ

ふる里と結ばれた歴史を訪ねて

佐伯史談会会員 富沢 泰
柳ノ浦史談会会長

○はじめに

去る二月十七日、十八日の両日、蒲江町史編さん委員会の有志十三名は、隣接する宮崎県北蒲新三川内から国道十号線に出て、一路南に下って宮崎市まで、沿道の各地をたずね、史跡・古墳・発掘文化財などの、見学研修の小さな旅を試みた。

その意味するものは、遠く神話の時代や、中世から近世まで、豊後の最南端蒲江の海と陸は、日向に通ずる接点であった。それは現在もなお然りで、大きくは日豊海岸国定公園、佐伯ー延岡線の国道指定、日常生活の中の漁業の関連や物資の交流等、今後ますますその緊密性が加わることと思う。

私たちがこうした中で、古い時代の関わりあいをたずね、その実相をつかんで、町史編さんの一助としたいというのである。

さらに今回、宮崎県総合博物館で、「日向の古地図と古文書」の特別展覧会が、二月十五日から開催されておられ、同博物館の学芸部長沢武人先生が、万事業内、解説して下さるといふ。先生は北川町長井のご出身で、「島ノ浦・深島・屋形島」の離島の学術調査に再度蒲江に未られ、詳細な調査業績をもっておられる。また羽柴先生とは同様の親交を十年近くも続けておられる間板、連絡もと

られており、その沢先生のご指導に期待しつつ、この研修行となった次第である。

参加した諸氏も、それぞれ担当の立場から、貴重な收穫があったものと確信している。

○国境の峠を越えて

「道は人が通る。道は歴史の足跡が積もっている」といふ。その積もった歴史の足跡を尋ねて、私たちは今この道を通っている。そうした実感は、蒲江町内には、他に例を見ない三川内越えである。

丸市尾からのこの峠を焼尾峠と呼ぶ。峠道は北蒲町の三川内に通じている。車中、元名養屋村長とつとめられ、たす高定吉氏は、おおよそ次のようなお話を下さった。

「大正五年、私は丸市尾小学校の高等科に在学していましたが、その頃三川内から男女七名の同級生が、十二名の峠道を越して、朝夕通学していた。

当時は三河内は勿論近くに高等科はなく、延岡は遠くて通学不可能、従って峠を越して丸市尾が最も便利であった。今日では到底考えられないことであるけれど、

病人が出たら医者も、患者が馬の用意をして、三川



内から丸市尾まで迎えに来ていた。三川内は良質の木炭の生産地で、その搬出はもっぱら馬の背によって峠を越し、丸市尾の問屋に集められ、船に積んで瀬戸内から阪神方面にまで運ばれていた。従って資金や人の交流が盛んとなり、

名護陸地から峠を越えて三川内側に、水田の出作りという形態すら生じていた。

また蒲江地方は土地板出稼ぎが昔から多く、私達の先祖は「日向山師」として、この道はその出稼ぎによく通る道でもあった。このように、この峠は、豊後の南端と日向とを結ぶ、重要な街道となっていた。

焼尾峠の掘切りは県境となっている。ここからの展望はすばらしく、西の空綾重かの日向の山々には、その山層に雪を残して白く光っている。東は遠く太平洋が明るく広がり、眼下には深島、屋形島が浮かび、長くのんだ名護屋鼻には葺する波頭もなく、早春の海は、極めておだやかである。

南方を望めば、三吉もあるうか、津島畑山(ホロハダ山)が黒々とそびえている。明治十年七月十七日の掛曉、陸軍の奇襲をうけて、予備の官兵二十四名戦死、外に負傷二十数名という血戦が行なわれた所である。葛原と波当津のつき上げにあたる山である。もうやがて百年になる古戦場、蒲江町にとつは最高第一の史跡である。

春めくや 古戦跡の跡 津島畑山 (和名) 畔

掘切りの道のほとり、気がつけば地藏尊が祀られている。「天保二年卯四月 施主 おてつ おなつ き、ち」などの文字が読まれる。道中の安後を祈って「柴折りやん」ととなえ、柴を折って供える風習の跡でもある。誰かが柴を供え、賽銭をおけている。恐らく車の無事を願ったことであろう。

風そよと峠の石の地藏尊 正 畔

峠からは見えないうが、津島畑山の南に陣ヶ峯がつづき、すくその西に近く尾高知山がある。そこは大永七年(一五二七年)相牟礼城主佐伯惟治公自刃の地で、今も風雪に朽ちかけた墓塔と靈廟がある。それは、波当津から陣ヶ峯を

越えて行く道は遠くない。

三川内は中世末期、悲運の領主佐伯惟治公の亡命逃避、そして終焉の地だけに、多くの遺跡や伝承があり、祀っている社寺が多い。尻尾の富屋神社もその歴史の流れの中に位置づけられるが、今々の三川内の昔をしのべた目にはうつつる峯々谷々に妖気がこめられているやに思われるが、そうではなく裏腹に、幸窓にうつる三川内谷の風物は、全くの桃源境である。

霜代しらふみてたたずむ国ざかい史跡の尻 根のかかやきて見ゆ (峠) 後 朔

○西郷宿陣跡と可愛山陵

国道十号線にそって南に流れる鑛川に、三川内からの水は葛葉で合流し、徳田で北川の流れを加え、豊かな水量をもち延岡市の東海に達し、海に注いでいる。

その下流北川所(儀野)に車を駐めることにした。宮崎県指定文化財となっている、史跡西郷南洲宿陣の家を訪うためである。百年も近い今も西郷南洲が滞在した農家が感づいている。当主は児玉剛誠さんとおっしゃるが、おいらく皆さんご不在で、くわしいお話は聞けなかった。西郷が起居したという部屋は当時のまま、藁屋根はそのままだでトタン葺きの格好になっている。

前庭に北川村教育委員会が建てた案内板があった。

県指定文化財 史跡

西郷南洲宿陣跡

明治十年八月十五日、官軍五万に對する薩軍三千五百、和田越の激戦は薩軍に利非ず、西郷は退いて俵野児玉熊四郎宅に宿陣すること二日、ここに諸將の軍議となり、決戦が脱出が容易に決し得ず、西郷隆盛は秋風落葉たる心境の中で、ついに八月

十七日夜 可愛岳突破を決行する

孤軍奮闘破圍還 孤軍奮闘圍を破つて還る

一百里程墨壁閉 一百の里程墨壁の閉

我劍既摧吾馬斃 我劍は既に摧れ吾馬は斃る

秋風埋骨故郷山 秋風骨を埋む故郷の山

敗走百里の端を登した宿陣の跡こそ大西郷の面影を偲ぶべ切たるものなり

昭和四十三年三月十七日誌之

北川村教育委員会会

北川村に三川内から薩軍が侵入したのは六月下旬、津島畑山戦は七月十六日。それから一か月、日豊国境の各地の戦いに敗れた薩軍は、宿陣地俵野で新戦の結果背後にそびえ立つ峻々たる可愛岳(七七八坪)を越え、三田井から九州山系の稜線にそって、官軍の追討を避けて必死の踏破十数日、故郷鹿兒島の城山に還つたのは九月一日、血戦を続け、九月二十四日南洲の最期と共に、西南の役は終つた。

南洲を中心に義術を練つた歴史上の人物、桐野利秋、辺見十郎太も、この兒玉家に在ったことと思ふ。縁先は並べられた当時南洲が使用したという、枕・硯・燭台、それにラッパ、矢立、手箱、小銃、銃聲など数々の遺品に心残しつつ、宿陣の跡を去つた。

可愛山陵は、兒玉家から百歩民どのすぐ後ろ、小高い丘にあった。まわりを雑木の樹林に包まれた田境で、その墳上に土多数の樹木が枝をうちかおしている。さほど大きくもない。天孫瓊々杵槌の山陵であるといわれている。尊の山陵は、鹿兒島県川内市に指定されており、ここは伝説地となっている。日本書記に記されている「筑紫の日向の可愛の山陵に葬めまつる」とあることは、天孫降臨の高千穂峽、天の岩戸開きの岩戸神社の神話の

地が近いだけに、ここでは伝説をすなおにうけてこの山陵から下った。

ふり仰げば山陵の上は高々と可愛岳が仰かれ、早春の陽をうけて山はだが薄く赤紫に美しく望まれた。

故郷の山に血路をひらきたる可愛岳愛し日

向路の旅

南洲の宿陣跡の屋根越しに巖し可愛嶺春

近からむ

可愛山陵ひろ場に春は茂けれど

○鐘の鳴る延岡城山

旭化成の都市延岡は、農業による県勢振興を標ぼうする宮崎県の中では、異質な存在である。北川、祖子川、五ヶ瀬川等、豊富な水量とその沖積土の上は振げた土地は、近代工業都市化の基本条件を備えているが、古くは内藤氏七万石が善政をしき、暮末まで、鐘の鳴る城山の城主であった。

いま、日向全城はおろか、佐伯、別府までも唄われ隔られて、延岡の民謡「ばんば踊り」の一節を紹介しよう。

鐘がなるなる城山の鐘が

おれは三百年時うつ鐘よ

町の歴史をひそめてひびく

歌人牧水幼ない頃の

心いとしな名歌を残す(以下略)

佐伯は国木田独歩の居住したの故、僅か一年にも足らなかつたが、しかし佐伯を愛し、自然を愛し、鶴谷城址にはよく登っている。これらを題材として、独歩の佐伯文学は生まれた。

その独歩に私淑した若山牧水も、自然主義歌人として、

日向の人々にとって、忘れられない人である。
旅の歌、酒の歌、恋の歌、ふるさとを思う歌、その名
歌は多い。延岡城跡にある歌碑は、今植ががおり、也が
て咲く桜の繁りに囲まれている。

なつかしき城山の鐘鳴り出でぬ

幼なかりし日聞きしごとくに

牧水は、東臼杵郡東郷村坪谷で生まれ、延岡で高等小
学校、延岡中学校と、九か年と暮らしている。そして城
山の鐘をきいて成長した。その鐘の三百年の歴史につい
ては、鐘を撞きついで五代目の当主稲田氏から、前田藤
長ががきいてくるので、その資料から抜粋しよう。

慶長十八年(一六四一年)有馬氏が封ぜられ、その二代
康継の時に造る

2 其の後、延享四年(一七四七年)内藤氏が転封して来た。

3 幕末、明治初期、砲弾等に鍛造のため微発せられるこ
とをおそれ、今山八幡の境内池の畔にかくした。

4 その間は鐘の代りに太鼓を打ち鳴らしていた。

5 西南の役後、明治十一年、城山天守閣跡の現位置の
鐘様に鐘を定置した。

昭和三十八年(一九六三年)内藤記念館に文化財
として保存し、新たに鍛造し、現在に至る。

時の鐘として三百五十年になる。稲田氏はその鐘を撞
いて、五代、百余年になるという。

この鐘の首に明け暮れた歲月こそ、延岡の近世から現
代への発展の歴史である。延岡の一切の文化財資料など
は、城山に集められている内藤記念館に展示されている。
そこは以前、内藤氏の居館の跡である。

佐伯惟治公を襲った三川内の新名党は、有馬氏以前の
土持氏の支配下にあった。その土持氏は、宇佐神領の荘
官で、奈良時代以降中世まで七百年、この地方を支配し、

後・大友宗麟によって滅ぼされた。ここにも豊後といふ
れおいは深い。

後 明
幾世代ただひたすらに守りつぐ城山の鐘い
ま鳴りわたる

城山の鐘打ちつぎて百余年五代目の顔ほこ
らしげに見ゆ

同 大
甬やわらかも椿咲く天守台

同 大
牧水の歌碑にゆく道梅の咲く

神武神話の宮々

美々津の巻

日向市北、美々津に近い金ヶ浜を過ぎる頃、国道十号
線は高台を走り、はるかかにびよびようたる太平洋と望
む。その景観は、かつ然として壮大である。金が浜でと
れたたまぐりの殻は、白基石となり、ここはその特産地
として知られている。

耳川の橋から上流は、主流を椎葉溪谷の水とし、支流
は坪谷川で、流域は若山牧水の生地坪谷があり、また西
郷南洲が日向脱出に多を發す神門の山々がある。

大友、鳥津の耳川合戦の地はあまり遠くはないとい
うが、神門の都合で割愛し、神武天皇を祭る立懸神社に参
拜することにし、鉄橋まで下り近い河畔の社前に車を寄せ
た。

古事記に
神倭伊波礼比古命 その同母兄の命 日向より筑紫

に幸でましき
とあり、宮崎から陸路をとり、この耳川の河口巻美々津
を船出したと伝えられている。日本書紀によると、

「天皇親ら諸皇子を齎して、舟師、東を征ちたまふ。
舟師速吸理に至ります。」

とあるが、速吸門はいうまでもなく豊予海峡。だから今

日の日豊海岸固定公園の海域そのままを北上したことになる。

神武神話の研究書によると、この舟師は、美々津から細島へ、そして豊後に入って入津湾畑野浦、依伯湾大入島の日向泊、それから佐賀関、宇佐となっている。その伝説の地畑野浦の伊勢本神社（祭神は神武天皇）の松本宮司も本日同行の一人で、紀元二千六百年の祝典行事の「おきよれ」の思い出を語る松本宮司の表情は、感に堪えないばかりに輝いてくる。

耳川河畔の大きな自然岩に鎮座をさる立磐神社の宮居、社殿の後ろには、見事な柱状節理の岩が群立している。社殿の下を流れる耳川の豊かな流れは、太古も今も変わらないであろうが、この舟出の港は、奥地の木炭、木炭などの林産物を、海路瀬戸内から阪神へと送り出す、日向では数少ない港として、江戸時代は盛んな津であった。しかし今日の交通の変化には、その面影も薄くなり、「神武の船師、船出の地」、すなわち「日本海軍祭祥之地」として、波頭にかたどった巨大な記念塔は、「海軍大臣内閣総理大臣米内光政」の記念があり、何か神話めいて、遠い世界のようか思える。

対岸の大きな社叢、権現尊に大洋の波濤が白く砕けていたが、この沖合が、日豊海岸固定公園の南端ともなるのである。

日向かばちや

バスは美々津を後に、都農に向こう。日向民謡の一節



「日向かばちやのよか嫁女」
この民謡の起ころはいつ頃かしら
ないが、この都農は昭和十四
五年の頃は、促成栽培の日向南

にある、
にある、
にある、

瓜の中心地となっていた。しかし今では、日向路全域が施設園芸化した農村風景である。その農産物も今日では日向市細島港から大型フェリーで、京浜地方の市場に積み出されている。私たちが佐伯地方の双かん頼も、それを極力利用している。

うつらうつら春陽に眠り日向路を 匠 暁

都農から宮崎へ

都農町には、遠く延喜式（九〇五年）神社として記載され、日向一宮としての都農神社が、国道十号線沿いにある。ここも神武神話の宮で、天皇は征途の安穩を、大己貴命（大甕主命）に祈念したという有名な宮である。従って神域は樟の老木がうつらうつらと繁っているが、古代人はこの木を「くり舟」としてよく用いたという。

都農の隣の町、川南の畑の中に、大友宗麟と島津義久の合戦場が、「宗麟原供養塔」としてその跡をとどめている。わか豊後大友勢は惨敗を喫した。その先鋒が部將佐伯宗天（十代惟教）の率いる佐伯軍勢は、宗天父子をはじめ軍勢の殆んどが、退却の途中島津勢の追撃をうけ、耳川（岩抜川とも言う）の戦で徹底的に打撃をうけたのである。つまりこのあたり、われらの先祖の惨敗の古戦場であり、その土の中に先祖の血がしみこんだ跡である。

神武東征の日向出発は、今の宮崎神宮のあたりである。道にそうて大鳥居が、裏参道、表参道とそれぞれあるが、明日の宮崎総合博物館の見学が、この宮崎神宮の神苑にあるので、すべて明日に残して、一陸車は青島に向かうことにした。

青島

ピロ―樹生いしげる青島、宿の荷物を置いて、時間があついで青島をたずねることにした。

青島は、日南海岸ではあまりにも有名なだけに、今さ

ら書く要もあるまい。右左神武神社の宮々とかかわりの

おまじりおまじり(伊勢神宮) | 天恩徳取命 | 瓊杵作命

(可愛山陵) | 彦火火出見命 (青島神社) | 鷲遊草草不

命 (鵜戸神宮) | 神武天皇 (宮崎神宮)、つまり神武

天皇の祖父神、彦火々出見命が祭神なのである。

神社の由緒には、命が海樞宮からお遷幸の際の御宮居

の跡として、命豊玉姫命、塩筒筒命をまつたと、平安

朝の頃「日向土産」に記述されているという。

この塩筒筒命は「塩土翁」が、彦火火出見命と目無籠

(目のない籠) 水へ入らない籠の意か) に、齒染の葉を敷いて

龍宮に送ったという古伝から、齒染の浮島ともいわれ、

また海幸、山幸の伝説もある。

砂岩と泥板岩との互層が、長い長い海食によつて鬼の

洗濯石となり、島の四周を囲んでいる。そして島全体が

びるりの自然林と数多くの熱帯植物におおわれている。

浜から望む南の果ての水手線から、私たちが先祖は海

洋族として渡来したにちがいないと、そんな想念が浮かぶ

島である。

神々にいのることばの多くして誠ひとつて

誓ひていたり
風紋や青島の浜に春日暮る
近 俳 朔
つづく

(余白)

(獨集子)

文字通りの研修の旅、第一日青島では陽が落ちて、
浜風が冷たい。ふと浜辺に大野伴睦の句碑があるのに
気がついた。立ちよつて見ると次の句が書かれている。
異国めく日向青島 青あらし
万 水

報告

水浦鉦山部落の墨つけ祭

去る二月二十三日、宇目町の奥水浦鉦山の部落で、
らしい墨つけ祭があると言うので、かつて繁栄の鉦山の
跡を見たく、二三の友と出かけた。



↑ 衣振

す及つけ祭は、鉦山の守護神山神社と、氏神で
ある熊野権現の祭で、旧正月の十一日に行われ、
正月休みが終り、初仕事にかかると山あがりへの神事だ
そうである。(広報うめまて二月号による)

常に危険がともなう鉦山の入たすが、火の神(家の神)
を鍋ずみられたとえ、これを額につけることによつて、す
べその災いから身を守り、鉦山の繁栄を願うのである。

着いた時には公民館の前には、高さメートルほどの大幣が二基立
て、中では県紀事代理が来ていて、「ふるさと大分」振興事業で送られ、
頭蓋式が行われていた。特異な民俗風習としての趣意である。

生大根の切口は鍋ずみを、てんでに相手がまわすぬり
つける珍らしい賑わいで、若い人達に押し立てられた二
基の大幣の進行、笛大鼓のほやして進行するにつれて、
賑い最高潮となる。中老の人は娘さんを後ろからかか
えるようにして鍋ずみをつける。するともういくつも鍋

が及せつけられていく婦人会の連中が、まわりから取り
囲んでぬたくる。たちまちその男は額中が真っ黒になる。

喊声があつたあがる。あまり逃げようともせず、つけら
れるものにつけるものも、喊声をあげての賑やかさであ
る。

私は同行の清田氏と一しょにエメリー礫石の砕石場を見て廢坑
の前を廻り、消え残りの雪道を登つて、天狗干山のズリ道を少し下
つて、山神社(山ん神さま)に参拝した。そして江戸時代から明治にか
けて盛んに採掘されてきた錫鉦山を想い見た。

部落からは岩戸神楽のほやしかにききかたに聞こえてくる。
帰りには大分探訪歩こう会のバスの幸便をいただいた。